『風につれなき物語』の現存本文について

新美哲彦

一　はじめに

『風につれなき物語』は、鎌倉時代に製作された屈指の長編物語である。それは、文永八年（一二七一）撰進の物語歌撰集『風葉集』に四五首[1]（詞書の歌も含めると四六首）も入集していることから知られる。ただし、完本は伝存せず、『風につれなき物語』とされる残欠の物語が一系統四本のみ存する。この四本はすべて伝後醍醐天皇宸翰本（所在不明。以下、伝宸翰本と呼ぶ）を共通の祖本とする。なお伝宸翰本には物語名の記載のなかったことが知られている[2]。

『風につれなき物語』とされる現存の残欠物語（以下、現存本と呼ぶ）の本文については、現存本が『風葉集』撰集時点での『風につれなき物語』（以下、原物語と呼ぶ）の残欠である可能性と、原物語の簡略化されたものの残欠である可能性が従来考えられてきた。この問題に関しては、市古貞次[3]が「あるいは原作の所々を省略した一種の簡約本（「いはでしのぶ」の三条西家本のごとき）かと思われる節もないではない」と言及したのち、小木喬[4]が日本古典文学大辞典の「風につれなき物語」項で『風葉和歌集』の四十六首のうち、現存本のものと一致する歌が五首あるが、現存本文中になければならない五首の歌が見えない。また文章も硬い感じがすることから考えると、現存本は、古本の叙情部分を省略し梗概化に向かった改作本のようである」と述べたことで問題の所在が明確になった。しかし、小木所説は、辞典の項目という制約から論証が示されておらず、「現存本文中になければならない五首の歌」も具体的には指摘していない。

小木以外にこの問題を正面から取り上げた論は見えないが、『風につれなき物語』について、欠巻部の復元のみではない体系的な考察を初めて行った樋口芳麻呂[5]は、明確には述べないものの、小木とは逆に、現存本と原物語が同一であることを前提に立論する。近年の論においては、妹尾好信[6]は、「改作があったかどうかはともかく、現存本に本文上いろいろ欠陥や疑問点が多いことは否定できない」と現存本に関して疑義を呈しつつも、「所々虫損

のため判読不能な箇所がある他に、明らかに本文に脱落の認められる所が存する不完全な本」という視点から立論しており、森下純昭[7]は、自論においては論証を経ずに「ここでの検討は、現存本が原作の簡約本であることを前提にしてすすめていくことにする」として論を展開するが、中世王朝物語全集解題では「これがこの物語の本来の文章であるのか、あるいは梗概化または改作された結果の文章であるのか明かでないが、読後感として（中略・市古、小木説の引用）との見方もある」と、一説として紹介するのみにとどめている。

このように、依然、混乱した状態にある、現存本の本文の問題の検討と整理は、今後の『風につれなき物語』研究をすすめる上での大前提となろう。そこで、現存本と原物語との関係を解明すべく、現存本の一本である丹鶴叢書版本（以下、丹鶴本と呼ぶ）に脱落かと注記される二箇所、研究者により脱落が想定されている別の二箇所、および、詞書に相当するかと推定される場面が現存本にありながら、現存本には見えない『風葉集』所載歌八首、以上を以下の論考で検討する。

二　脱落想定箇所の検討[8]

（1）丹鶴本注記箇所Ⅰ

イ　宇治入道関白、むすめどもに裳着せ侍りける腰結はせ給ふとて　　風につれなきの冷泉院の女院

いづれをも木高かれとて春日山松に千年を祝ひ添へつる

（風葉集・賀・七一七）

A　①殿のひめ君もやう〳〵おとなになり給ぬれど、はゞかるかたなうもてなしてまゐりたまひにしに、きほひがほならむも、たとしへなき御心は物うくおぼされていつとなきを、内にもおほみやも「ひが〳〵しき事なり」とのたまはすれば御もぎのことおぼしいそぐ御こゝろまうけおろかならず。

（中略）ひめ君は十三にやなりたまふらん。ほそくちひさき御すがたいとなまめかしくうつくしげなるに、いたくこちたくはあらぬ御ぐしのすぢ、かゝり、けうらにめでたくて、すそのはなやかなるそぎめまで人にはにたまはず、めづらしきさまにぞみえ給。たけにすこしあまりたまへるほどなり。あふぎにはづれたる御ひたひつきなどあてにをかしげなる事そこゝそとなうきはもなくぞみえ給。あまりつゝましげにまぎらはし給へれば、御かたちさやかにはみえねど、たぐひありがたくぞものし給。こひめ君はまだいわけなきほどを、かたなりならずもてつけ給あふぎもいたうさしかくし給はず、はづかしとおぼしてうつふしたまへるに、こぼれかゝりたる御ぐしの、色も、つやも、いますこし「きむのうるし」とかいひつべく、すぢことにきらめきて、はな〳〵とあたりもひかり、にほひこぼるゝやうなるさま、たとへむかたなうさかりになりおはせむほど、又ためしあるまじき人の御かたちなめり。②こは〳〵しかりぬべき御ぞども、うらめしう、いつともなき御まゐりを、大宮にもせちに心もとなげに申させ給心くるしさは、「としのうちに」とそゝのかし給はせむには、なにかはとゝこほり給はむ。

（集成三八七頁～・全集一一八頁～）[※]

Aは姫君達の裳着の場面である。丹鶴本では傍線②上部欄外に「御そともノ下原本落丁ありとみえたり」と注記する。一方、イの詞書は、姫君達の裳着の場面を示している。これらにより、丹鶴本注記箇所に脱落を想定し、そこに『風葉集』七一七番歌が入っていたものと見る樋口芳麻呂の説がある。

丹鶴本では、注記が施されていることもあり、何らかの脱落を想定したくなるが、この箇所は、伝宸翰本を丹鶴本よりも忠実に書写している無窮会図書館蔵神習文庫本[9]（以下、無窮会本と呼ぶ）では次のようになっている。

「こは〳〵しかりぬへき御そともうらめしういつともなき御まいりを大宮にもせちに心もとなけに申させ給」（七オ～七ウ）

「も」が一字増えるだけだが、無窮会本の本文であれば、脱落を想定せずに解釈できる。「又ためしあるまじき人の御かたちなめり」までを大宮（後の冷泉院の女院）の視点と見、「こは〳〵しかりぬべき御ぞども」から大君（後の弘徽殿中宮）の入内を母の大宮に催促する今上帝（後の吉野の院）の様子と取るのである。問題となる部分を試訳する。

ごわごわしていたに違いない（裳着の時の）お着物（に埋もれるぐらい小さくかわいいであろう姫君達の姿）もうらめしく、いつともはっきりしない（姫君）の入内を、大宮に対してもしきりに不安そうに催促なさる（以下略）[10]

右のように解釈すれば、よしんば無窮会本の「も」が衍字で、丹鶴本本文の方が伝宸翰本と同じであったとしても、解釈できる。また、場面Aでは、傍線①に帝と大宮が入内を勧めた事により関白が裳着の儀式の準備をしていたことが書かれており、この描写が傍線②の脱落かとされる部分の前後の描写とつながっている。だから右の解釈の方が、文の構造としても整合性が高い。よってこの部分に脱落を想定する必要はない。場面Aに脱落がないとすると、歌イの入るべき場所がなくなるから、この部分は記述の簡略化が行われていると見ることができる。

（2）丹鶴本注記箇所Ⅱ

B　御まへの前ざい露にをれふして、つくろふ人もなきにやとしどろなるしも、み所おほくぞあはれなる。さるにはあるまじき事なれど、さもやとおぼしよるなりけり。中納言もおろ〳〵心えたまへれば、さばかりことかたになびかじとおもふもしほのけぶりし、さすがにたゞよふなるべし。むしのこゑ〴〵みだれあひて、たちいでがたければ、ふけにしよひ、あか月ちかくなりにけり。夜べのとぐちには少将ふえふきならしなどしつゝ、そぼれゐたるなるべし。いで給とてたちより給へれば、少将もたちなむとするに、うちより、

ながめつる月よりほかにおもほえずやすらふかげもあかであけぬる

といふに、こゑもさはやかにわかびたり。つまどのかげのかたに中納言より給て、

まきのとをさしてきなましながめても月よりほかにまたれましかば

としのびやかにのたまふを、きえかへりめでたしとおもへるけしきしるければ、少将はやがていでぬ。又こたへぬさきにとい

で給ぬれば、なごりまことにあかずおぼゆべし。

（三九八頁・一三五頁）

場面Bは、権中納言が少将と連れだって先帝の后であった一条の宮を尋ねるところであり、丹鶴本では傍線の上部欄外に「さるにはノ上脱文あるへき歟」と注記がある。

現存本の前後の記述から判断すると、恐らく妹尾好信の推定するように「后宮に対面し、娘の女三宮との縁談をほのめかされたよう」と解するのが無難ではあるが、傍線部分は恋の描写のようにも感じられ、「あるまじき事」とも表現されている。また一条の宮はすぐ後に次のように描写されている。

C　みそぢにもわづかにあまりたまへる御よはひなれば、①わかうさかりにあたらしうぞおはしましける。左のおとゞぞいろなる御くせにて、むかしより心にて思きこえ給へれど、ことのほかにけどほき御もてなしに心やましくて、なさけなき事もうちまじりたまふを、めざましくおぼされながら、②中納言をばおぼしもはなたぬぞあやしきや。

（四〇〇頁・一三七頁）

場面B傍線部、ならびにC①②の記述から考えると、一条の宮と権中納言の間に、あるいは女房と権中納言の間に関係があったと考えても不思議ではない。もっとも現存本では、後の記述によって一条の宮と権中納言との間には関係がないらしいことが知られる。

場面Bは意味が取りにくく、目移りなどによる脱落ではないかと思われるが、他の脱落想定箇所に男女の接近の場面が多いことを勘案すると、場面Bも脱落ではなく、描写が省略されたため意味が取りにくくなっている可能性を考える必要がある。

（3）脱落想定箇所Ⅰ

ロ　同じ女院に近づきたてまつらせ給へりけるに、おぼし入りて、むげになきさまにならせ給ひて出でさせ給へる後によませ給ひける　　よし野の院の御歌

あさましやさてもいかなる憂さぞとも恨むばかりの契りだになき

恋しとも憂しともなにに思ひけんかかるつらさを限りける世に

（風葉集・恋二・八四七～八四八）

D　五せちすぎにしまたの夜も、中宮うへの御つぼねにわたらせ給ほどに、いかなる御こゝろのまよひかありけん、姫君はたゞさばかりをおそろしとおぼしまどひて、あかつきこきでんにおり給しまゝに、御むねをさへいみじうなやみ給へば、おぼしさわぎてまかでさせたてまつり給。かの二条のうへときこえし、いまはみくしげどのときこゆるぞそひていだしきこえ給。まことにはさせる御心あやまりあるべきほどならねど、おぼしもわかずたゞおそろしとおぼしけるに、御心ちたがひにければ、さすがに日かずふればよくなりたまへれど、つゝましくて人にもみえ給はず。

（四〇二頁・一四一頁）

現存本には、歌ロの詞書に相当する場面Dがある。場面Dは、帝（後の吉野の院）が、姫君（後の女院（中宮の妹））に関係を迫る場面である。現存本では傍線部のように書かれているだけであるので迫った状況や誰が迫ったのかは明瞭ではないが、その後の記述により帝が姫君に関係を迫ったことは明らかである。

場面Dと歌ロについて、妹尾は「本文中に特に文意の続かない

ところはなく、どの部分に脱落があるのか判然としないがここに（中略）2首の歌が存在したはずである」と述べ、樋口も「元来は前掲文の『いかなる御こゝろのまよひかありけん』と『姫君はたゞさばかりをおそろしとおぼしまどひて』の間に含まれていたが、本文に欠脱が生じて抜けてしまったのではないかと疑われなくもない」（樋口は最終的にはこの可能性を支持しない）と述べる。しかし詞書には「出でさせ給へる後に」とあるので、もし詞書の場面が場面Dであったとしても、歌自体は場面Dの後にあったはずである。よって、歌口が物語の上で占めていた位置の推定と、場面Dの脱落の可能性とは別に扱うべき問題である。

場面Dの脱落の有無だが、脱落と明白にわかる箇所はなく、歌口の問題がなくなった以上、場面Dに脱落を想定する必要はない。

（4）脱落想定箇所Ⅱ

E　人きかぬまには、いはうつなみのくだけはてぬべき心のうちをせきかね給を、あはれにふかく思けり。おとゞのおぼしやすらふことのすぢも、ほの〴〵心えたれば、きはたけうめざましともさしはなたず、さすがにかけたるけしきぞ物思ひのもよほしなる。はなざかりのくもりなかりしあさがほよりは、まことにあくがれにしたましひもかへらぬにや、うつしごゝろもなきよしを、とほき人はきかぬほどに、れいのうらみつくし給へど我こゝろひとつにともかくもいらへきこゆべきことならねば、つく〴〵とき、ゐたるを

（三九七頁・一三三頁）

場面Eは、権中納言（後の太政大臣）が小姫君（後の女院）への恋情を、小姫君の住む関白邸において女房に訴えている場面である。妹尾が「現存本には春の花盛りの頃の記事はなく、どこに脱落があるかは全く不明である」と述べるように、場面Eに書かれる小姫君の「はなざかりのくもりなかりしあさがほ」を権中納言が見た箇所は、現存本には見当たらない。権中納言の小姫君への恋情は現存本では場面Eの前に次のように描かれる。

F　我も〳〵とむこにとりきこえんと気色ばみきこえ給ふひと〴〵、我はとおぼしたるかぎり、あまたものし給へど、①ふた葉よりおもふすぢことにしみにしかば、なべての事にみゝもたゝず。こきでんの女御の御事はかねてよりみなおもひし事なるだに、あながちに物なつかしかりし御けはひなどの、いまとてもあさくらやまならずまゐりつかうまつり給事、まことの御はらからのやうなれば、人しれず心にしまずしもなきに、②いまひとしほふかき思の色まさる御かたちありさま、よにまたためしやはあるべきと、いわけなかりしより心のかぎりみだれそめにししのぶもぢずり、たれゆゑならねど、中々に人めしげきあしがきにめなれて、我も人もうちいづることもなくてすぎゆくを、やう〳〵ねになきぬべくおぼしたる気色を、つねにかたらひ給心しるどちは、心ぐるしと思きこゆれど、もらすまでは思よらざりけり。

（三九四頁・一二八頁）

傍線①②に幼時から小姫君を想っていたと描写されていることから、小姫君の「あさがほ」を見てあくがれる設定自体、鎌倉時代の物語にしばしば見られる構想の破綻と見ることもできなくはない。しかし、場面Eにおける権中納言の小姫君への想いの吐露は、小姫君の「あさがほ」を見る場面が初めから物語内になかっ

たとするといささか唐突で、小姫君への想いを再確認することになった「あさがほ」を見た場面が存在した方が、物語の展開としても穏やかである。

また、権中納言の小姫君への想いが単発的な挿話ではなく、権中納言が帝と共に男性の側の中心人物として描かれていることや、小姫君が女主人公であることを考えても、やはり小姫君の「あさがほ」を権中納言が見た場面が存在した方が自然だろう。

すでに妹尾が「このあたりは単純な脱落と思えない面もあり」と疑問視しているが、「あさがほ」を見た場面が省略されたことによって現存本本文に矛盾が生じている可能性は低くない。

三　『風葉和歌集』所載歌の検討

(1) 八四七・八四八番歌

前節に挙げた歌ロについて考えたい。歌ロが従来の脱落想定箇所にあるはずのないことはすでに述べた。問題とすべきは、詞書の場面と場面Dが同一か否かである。同一ならば、歌ロの入るべき場所が現存本にないことから、確実に歌ロは省略されていることになる。

歌ロについて小木喬[11]は「この歌は見えない。現存本の文では、次のように、二人の間に関係があったかなかったかわからないような書きぶりだ」と述べ、場面Dをあげている。小木は現存本の本文を簡略化されたものと考えており[4]、歌ロに関しても、現存本が省略していると考えていることは明らかだろう。妹尾は場面Dと詞書を同じものとし、場面Dに脱落を想定した上で、歌ロがその脱落箇所にあったと考えている。対するに樋口は歌ロを散逸した後半部分にある歌と推定している。

詞書の場面が場面Dと同一か否かだが、同じ様な状況が樋口の推定のように散逸した後半部分で繰り返されたとして、その時の歌ならば、妹尾の述べるように詞書は「同じ女院に（再び）近づきたてまつらせ給へりけるに」などとなるのではないか。また、何度も同じような場面が繰り返されたとも考えられない。よって二つの場面が同一である可能性は極めて高い。なお、詞書の「同じ」は前歌である八四五～六番歌の詞書を受ける。

それでは、歌ロはどこに置かれていたのだろう。歌ロの解釈について、樋口は「恋を断念するほかないことを悟るに至るのであろう」と述べている。確かに八四八番歌は、女院への思いを断ち切ったときに詠んだようにも見える。だが歌ロは『風葉集』では恋二の九首目と一〇首目にあたっており、配列から考えて恋を断念する時に詠まれた歌ではない。よってこの歌が特に後半の散逸部分になければならない理由は存しない。

樋口は「物語の現存部分には見出せない八四五・八四六の歌の次に、物語の進行の順に歌を抜いたことを示すかのように、八四七・八四八が並んでいる点も、五節次夜の事件の作ではない一証左となり得よう」とも述べている。しかし八四五～八番歌は物語の進行順に並んでいるのだろうか。なお、これらの歌の物語での順番について小木は八四七～八番歌の後に八四五～六番歌が来ると推定している。

まず、歌ロの八四七～八番歌と八四五～六番歌との前後関係に

ついて考える。『風葉集』で同じ物語の歌が並んでいる場合、物語の進行順であるかどうか、試みに恋部を見る。同一物語が並んでいる例が、同じ詞書が掛かる場合と贈答歌・散逸物語を除き、一一例[12]ある。そのうち、物語の進行順に歌が並んでいない事例が六例[13]もある。『風葉集』においては、同一物語の歌が並んでいる場合でも、必ずしも物語の進行順ではなく、独自の配列規準によって並んでいる。歌序から見ても、場面Dと詞書の場面が異なる場面でなければならない理由はない。

また、もし八四八番歌が恋を断念する時の歌であったとして、八四七～八番歌は物語の上で続いて詠われなければならないのだろうか。『風葉集』に載る現存物語の歌の中で、同じ詞書が掛かる同一物語の歌、という条件に合致するものは一三例[14]ある。これらのほとんどは歌の詠まれた場を規定しているので参考にならないが、場を規定したものでも歌の順が物語の順と異なっている場合も三例[15]ある。『風葉集』は、やはりここでも、独自の配列規準によって並び替えている。

右の例は八四七～八番歌とは詞書の状況が少し違うのであるが、八四七～八番歌と比較的似ている例が『うつほ物語』の『風葉集』入集歌にある。[16]

この例の場合、『風葉集』では三首に「藤壺の女御、いまだ参り侍らざりけるころ遣はしける　中納言実忠」と同じ詞書が掛かっていながら、『うつほ物語』ではいくつかの巻にまたがって詠まれているので、もし八四八番歌が恋を断念するときの歌だとしても、八四八番歌が八四七番歌の相当後に詠まれたものであっておかしくはない。

詞書の場面が場面Dと同じである可能性は極めて高いので、歌口（八四八番歌の内容には若干疑問が残るとしても、少なくとも八四七番歌）が現存本の範囲内に含まれていた可能性もまた極めて高い。

参考に現存本中の歌口が載っていた可能性のある場面を挙げる。

G　中宮のまたなうなよびかにらうたげになつかしくおはしますも、なほことなりける草のゆかりかなとおぼしめさるゝに、さても又よにしらずおなじのゝ露とかくべくもあらず、ふかゝりしむらさきのいろの、あるかなきかに思きえたりしけはひも、御身をはなるゝ世なきに、いとゞこのごろはまぎるゝかたなう恋しくおぼしめされて、

もしほぐさかきてもやらぬ思ひこそけぶりのはてもくゆり

（四〇五頁・一四六頁）

H　わびぬれ

とのゝひめ君はめづらしう心のどかにおはしますがうれしきにも、ありし事の思いでられ給はまばゆくつゝましきに、せめておぼしめしあまり、宮の御ふみのなかにことづけあるをり〳〵も、みせたてまつり給をば、いふかたなしとおぼして、涙をさへこぼして見いれ給べくもあらねば、心ぐるしさにはて〳〵はえとりいでさせ給はず。かいなきよしをきこゑさせ給へば、あひなしとおぼしめしとゞまりても、いとゞ心づくしにむかしはなにをとなげかれさせ給。

（四〇六頁・一四七頁）

Gは吉野の院が女院を思い浮かべて独詠する場面。またHは場面Gに続く場面であり、吉野の院がこの時期に繰り返し女院に文を送っていたことは後述の場面I傍線①のように後にも回想され

ている。場面G・Hのどちらかに歌口が載っていたと考えるのが自然であろう。

（2）八四五・八四六番歌

ハ　中宮かくれさせ給ひて後、同じさまに女院にきこえさせ給ひけるに、つれなくのみ見えたてまつらせ給ひければ

風につれなき吉野の院御歌

絶えざらん命こそあらめ同じ世にありてもつらき人の心よ

御返し

長らへてあるにもあらぬ身の憂さをなきが恨みの数になさばや

（風葉集・恋二・八四五～八四六）

ハの詞書「同じさまに女院にきこえさせ給ひける」とは、中宮の妹である小姫君（後の女院）に入内の要請があったことを示すものだろう。

歌ハについて現存本と原物語を同じものと考えている樋口は「散逸部分に入ると、（中略・八四五～六番歌を記載）とあって、吉野院は女院の入内を求めたものの希望はかなえられなかったことが察せられる」と述べる。また、小木も「『中宮かくれさせ給てのち、同じさまに女院に聞えさせ給』というのは、姉が入内したと同様に、入内することを希望されたという意味であろう。現存本の終の方に、大納言の君という女房を仲介に仰せごとがあるのを、姫君は『御返も申たまはず、若宮の御事などの大方なる御返は時々申給ふ折もあれど、心の通ひはかけてもゆゝしく云々』とあるのみで、この歌ははいっていない。もう少し後の方にあるのであろうが、これもまことにつれない返歌である。」と述べる。ともに入内の要請とその拒否は現存本の範囲内にはないと考えている。しかし現存本にはすでに帝（後の吉野院）が小姫君（後の女院）に入内を求め、その希望がかなえられなかった場面が描写されている。

ー　うちにはむかしの御かなしみも、へだゝるまゝにはさすがにうすらぐにそへては、ゆめのやうなりしおもかげぞ、いよ〳〵こひしくたへがたくわすれわびさせ給つゝ、みくしげ殿のむすめ、大納言の君をかしきかたちに御らむじつきて、ものゝたまはせなどせしかば、しのびてふるさとへうらみつくさせ給みちしばにと、いみじくかたらはせ給。いなびがたくてつたへきこゆるを、むつかしくおぼえ給。「むかしの御ことを、まことにあはれとおぼさましかば、我をもおぼしはなたざらまし。あさかりけり」とさへかこたせ給も、「よしなの御かたみや」とおぼして、御返も申たまはず。わか宮の御事などのおほかたなる御返は、時々申給をりもあれど、心のかよひはかけてもゆゝしく、①こ宮のくるしげにおぼしめして、御かほうちあかめて、れいの御ことづけとてつゝましげながらみせ給し御けしきのみ、まづ思ひいでられて、我あながちにわびしと思たりしを、心ぐるしげにおぼしめして、のち〳〵はたまはせしかども、物ものたまはでかへしたてまつらせ給しさまなどの、恋しくはづかしうおぼえさせたまふに、「なきかげとてもなにの心にかは、いましも心かはりて御返など世のつねめかしくきこゆべき」と、おぼしとりたるをもしらせ給はでうらみさせ給さま、日にそへてわりなし。まどひし心にうちつゞき、うかりつるゆめのかな

しびに、思だにいでられざりつるを、このごろぞたゞかばかりにてやと、涙におぼゝれさせ給し御けはひのいみじくえんなりしと、思いづるもうとましくて、②あからさまにもこゝのへのうちへたちいづべしともおぼえ給はず。（二九頁・一八四頁）

場面Ｉは、小姫君の姉中宮の死後、帝の小姫君への執着が、中宮死去の悲しみの薄らぐにつれて復活する場面である。小姫君の心情を傍線②と描写しているので、場面Ｉにおいて帝から入内要請があり、小姫君はそれを拒否していると考えられる。また小姫君は帝に対してつれない態度をとっている。

もちろん現存本の範囲以降に歌ハがあると想定できなくはない。しかし現存本と原物語とをいったん別のものと考えた上で場面Ｉを見ると、歌ハの詞書と同様、帝からの入内要請と小姫君の拒否が描写されているわけであるから、場面Ｉもしくはその直後に歌ハがあり、それが省略された可能性は高い。

（3）一四〇六・一四〇七番歌

ニ　入道関白、宇治にて千部経供養し侍りける時、吉野の宮より出でおはしましてよませ給ひける

風につれなき吉野の院御歌

先立ちて住み慣らしける山道を背く憂き世とたれ恨みけむ

御返し　宇治入道関白太政大臣

老が世の憂き目を見つの山道に君後れじと思ひかけきや

（風葉集・雑三・一四〇六～一四〇七）

J　中宮の御文どものつもりたるをしきしにすかせさせたまひて、御てづからこむでいの十部の法花経をはじめてかゝせ給、世にめづらかなる事どもせさせ給。そのわたりにすみけるひじりなどぞまゐりつかうまつりける。（四二〇頁・一七〇頁）

歌ニの詞書にある「千部経供養」が現存本にもJのように描かれている。詞書の「千部経供養」と現存本に描写される「千部経供養」が同一のものであるのかを見ていきたい。

まず場面Jだが、小木は「『世のめづらかなる事』というのだから十は千の誤り」と述べる。この箇所、無窮会本では「千」となっており小木の推定したように丹鶴本の誤りであろう。また小木は「現存本に（中略）あるものと、あるいは同じものかもしれない」と述べる。しかし歌ニが吉野の院が出家した後の歌と考えられるのに対して、場面Jでは吉野の院は吉野の宮にはおらず、行幸の場面も描写されていない。何より、宇治の入道関白が出家したばかりで、吉野の院は小姫君に執着している段階である。もし場面Jと歌ニの詞書が同じ場面を指しているとすると、現存本は原物語から筋書も相当改変されているものと見なければならない。そのような徴証は他に見られないから、歌ニの詞書の場面は場面Jとは異なる場面であろう。

（4）七八一番歌

ホ　一条の女三のみこに聞こえ侍りける

風につれなきの太政大臣

いかにせん色変るまでせき返し漏らしかねたる袖の涙を

（風葉集・恋一・七八一）

K　返たまひても、①大将は、皇后宮の御けはひをかしかりつるも、ましていみじときこえ給姫みやゆかしうおぼえ給て、物が

たりのついでに、おとゞにも「一条の宮にまゐりて侍しにこそ、后宮とおぼえ給し人のしか〳〵のたまひしもきこえ侍しか」と申たまへば、うちゑみたまひて、「いかにさばかり物ふかくおはするに、へだてなくはもてなさせ給けるにか。②おぼしよるすぢあるべし。御ふみたてまつれかし」などの給ひて、心のうちにはさやうのゆかりにことづけてや、あはでくちにしなかのおもひ、たよりもあらむとおぼしよるかし。うくつらかりし御心とねたうおぼしすつれど、かごとばかりもきゝ給には、心さわがれたまひけり。（四二九頁・一八三頁）

一条の女三宮と右大将（後の太政大臣・先述の権中納言）との関係について、現存本では物語の後半にKのように描写される。場面Kは右大将が一条の宮を訪ねその様子を父の関白に報告する場面である。この時点では傍線①に描かれるように右大将は姫宮を見ていない。しかし傍線②の父関白の言葉に「御ふみたてまつれかし」とあることから、この描写の比較的すぐ後に右大将は姫宮に手紙を送っていると考えられる。歌ホも『風葉集』恋一の前半に載るから、右大将が姫宮に歌を送る最初の段階の詠だろう。この事情を考えると、歌ホも、現存本の範囲内にありながら記述の簡略化によって割愛された可能性がある。

四　おわりに

従来脱落が想定されていた四箇所、現存本の範囲内に入る可能性のある『風葉集』の歌八首を検討した。原物語が伝存せず、現存本にしても零本であることから断定はできないが、本文の脱落というだけでは解決できない箇所が多く、現存本は原物語から簡略化がなされている、と見るのが妥当であろう。

それでは、原物語と現存本はどの程度異なっているのだろうか。物語歌は『風葉集』と一致する歌五首に本文の異同の見られないことから、他の歌についても歌の改変はなされていないと考えられる。また、現存本に見える『風葉集』歌の詞書と現存本の描写がすべて一致することから、物語の筋もほとんど改変されていないと見てよいだろう。

では、記述はどの程度省略されているのだろう。『風葉集』は、『無名草子』[17]で物語自体は酷評されるが「歌こそよけれ」と評される『古とりかへばや』を一二首も入集させる一方で、物語自体は称賛されるが「歌なども悪しくもなし」と評される『今とりかへばや』を六首しか入集させないことから、場面や物語の質よりも歌の質を重視して撰集していると考えられる。だが、場面を重視しないからといって、『風につれなき物語』が書き換えられた際に、出来のよい（はずの）『風葉集』入集歌の置かれる場面のみを削除することはあり得まい。現存本の範囲内に入ると考えられる『風葉集』歌は五首前後あり、現存本に見える『風葉集』歌は五首ある。歌数通り半分程度に描写が縮約されているとは単純に言えないながら、『風葉集』歌以外にも相当数の歌と場面が削られたと見てよいだろう。

以上の考察の結果、現存本は、原物語から、物語の筋も歌の言葉も変えずに、描写や歌などを大幅に削除し簡略化した、物語名を持たない首巻のみの残欠本（伝宸翰本）を共通祖本とする転写

本と見ておくのが妥当と考える。

稿者は、ここで扱った『風につれなき物語』本文の問題を手掛かりとして、今後も様々な物語作品の、様々な次元における変容や享受の実態を究明していきたいと考えている。

※『風につれなき物語』の引用本文は『鎌倉時代物語集成』第二巻（底本・丹鶴叢書版本）に拠ったが、『定本　丹鶴叢書』第二巻を参照し、句読点など適宜改めた。引用本文の末尾に『鎌倉時代物語集成』第二巻と中世王朝物語全集『風につれなき物語』の頁数を掲出した。『風葉集』本文は岩波文庫を使用し、校異は『増訂校本風葉和歌集』を参照した。

注（1）参考までに『風葉集』入集歌数の多い物語を挙げる。『源氏物語』一八〇首、『うつほ物語』一一〇首、『狭衣物語』五六首、『御垣が原』四三首、『いはでしのぶ』三三首、『浜松中納言物語』二九首、『夜の寝覚』二五首。ただし『風葉集』には欠巻部が存するので確定的な数字ではない。

（2）伝宸翰本を含む『風につれなき物語』諸本については拙稿「『風につれなき物語』伝本について」（『平安朝文学研究』復刊七号　九八・一一）参照。

（3）市古貞次『中世物語の展開』（岩波講座『日本文学史』第六巻中世・五九・四→『中世小説とその周辺』東京大学出版会　八一・一一）。

（4）小木喬「風につれなき物語」（『日本古典文学大辞典』岩波書店　八三・一〇）。

（5）樋口芳麻呂「風につれなき物語」（『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房　八二・二）。以下、樋口所論の引用はすべて同論文に拠る。

（6）妹尾好信「『風につれなき物語』管見」（『広島大学文学部紀要』第五四巻　九四・一二）。以下、妹尾所論の引用はすべて同論文に拠る。

（7）森下純昭「『風につれなき物語』考」（『岐阜大学教養学部研究報告』第三四号　九六・九）。中世王朝物語全集6『風につれなき』（笠間書院　九七・六）

（8）『風葉集』所載歌については第三節で考察するが、脱落想定箇所とからまざるを得ない七一七番歌については第二節で考察する。

（9）無窮会本については樋口前掲論文および前掲拙稿がある。

（10）裳着の場面ではないものの、『源氏物語』手習巻にも、浮舟に対して「こはごはしういらぎたるものども着たまへるしも、いとをかしき姿なり。」（日本古典文学全集6ｐ295）と、「こはごはし」い着物を着ている様子がかえって魅力的だと表現している場面がある。

（11）小木喬「風につれなき物語」（『鎌倉時代物語の研究』東寶書房　六一・一一）。以下、小木所論の引用はすべて同論文に拠る。

（12）参考までに新編国歌大観番号を挙げる。八〇五・八〇六、八三一・八三二、九二九・九三〇、九五二・九五三、一〇〇九・一〇一〇、一〇二三・一〇二四、一〇四九・一〇五〇、一〇八八・一〇八九、一一〇四・一一〇五、一一二九・一一三〇、一一四〇・一一四一

（13）八〇五・八〇六、八三一・八三二、一〇〇九・一〇一〇、一〇四九・一〇五〇、一一二九・一一三〇、一一四〇・一一四一

（14）一六・一七、六七・六八・六九、一二六・一二七、一三二・一三三、二二八・二二九、二二七・二二八、三六八・三六九、六一五・六一六、六三〇・六三一・六三二、七二二・七二三、七四七・七四八、七四九・七五〇、七九二・七九三・七九四

（15）一三二・一三三、二二七・二二八、三六八・三六九

（16）七九二・七九三・七九四

（17）『無名草子』は『完訳日本の古典』に拠る。

〔付記〕本稿は、九八年六月六日に行われた「早稲田大学平安朝文学研究会」における口頭発表に基づき成稿した。